

金剛頂經の研究

——降三世品を中心に——

柴田 勝久

はじめに

これまで『初会金剛頂經』（「金剛界品」の中の見聞大曼荼羅廣大儀軌分¹⁾。いわゆる不空訳『三卷本教王經』にあたる部分のみ。以降本經と訳す）の梵本テキストを中心とした原典中心の研究を行ってきた。問題の所在としては、以下の二点について調査を行った。一つは五相成身觀の悟りのプロセスについての考察、もう一つは本經における仏身觀についての解釈である。前者については以下に挙げる梵本と漢訳（不空訳²⁾、施護訳³⁾）及びその他の関連するテキストの比較を中心に、五相成身觀の内容に注目し、五段階の覺りのプロセスの中から『金剛頂經』の主要思想ならびに実践としての中心的役割を理解した。後者についてはインド中期密教における毘盧遮那（大日如来）と真言密教における大日如来との双方の間にある仏身に対する解釈の違いについて調査を行った。以下、使用したテキストを挙げる。

〈主要研究資料〉

【写本】

G.Tucci 書写本 189 葉（以降 T 本）

D.L. Snellgrove 写真本 147 葉（以降 S 本）

【サンスクリット校訂本】

堀内寛仁

「梵藏漢対照 初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇」上下二卷

（密教文化研究所 昭和 58 年（上）、昭和 49 年（下））（以降堀内校訂本）

Isshii Yamada

「SARVA-TATHĀ-TATTVA-SAMGRAHA NĀMA MAHĀYĀNA-SŪTRA」

Śatapiṭaka Series vol.262, New Delhi, 1979.

【藏訳】

Sraddhākaravarman, Rin chen bzai po 訳

“De bshin gśegs pa thams cad kyi de kho na nīd bsdus pa shes bya ba theg pa chen poḥi mdo”

【漢訳】

不空訳 金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經 三卷

施護訳 仏説一切如来真實撰大乘現証三昧大教王經 三十卷

研究目的と調査方法について

『初会金剛頂經』は儀軌分と教理分からなり、儀軌分は四大品（金剛界品、降三世品・遍調伏品、一切義成就品）で構成されている。四大品の内容は金剛界品を基本として、それ以降の品はほぼ同様の内容を繰り返し説く。また本經をわが国の「現図曼荼羅」にあてはめると、九つの会のうち「金剛界品」には六つの曼荼羅（成身会、三昧耶会、微細会、供養会、四印会、一印会）が説かれ、次章の「降三世品」において二つの曼荼羅（降三世会、降三世三昧耶会）が説かれる。

今回、「降三世品」を研究対象とした理由をおおまかに述べると「金剛界品」との思想の違いを調査することにある。その違いの一例として、主尊（曼荼羅の中心となる尊格⁴⁾）の違い、説かれる曼荼羅の数⁵⁾等があるが、今回は「金剛界品」中の金剛界大曼荼羅廣大儀軌分における主尊毘盧遮那如来（金剛界如来）と「降三世品」中の降三世曼荼羅廣大儀軌分における中心尊格である降三世明王の比較をし、できるだけ原典を手がかりとしながら、その思想的な相違点を検討していこうとおもう。

調査する上で用いた資料としては、先に挙げたものと重複するが以下のものを用いることとする。なお、梵本写本については「金剛界品」の時と同様に『堀内校訂本』の正確性を確認するための補助的資料として用い、また必要に応じて蔵訳、注釈等も加味して講読をした。

〈主要研究資料〉

- ・梵本写本（S本、T本）
- ・『堀内校訂本』
 - 「金剛界品」金剛界大曼荼羅廣大儀軌分（§1 - 617）
 - 「降三世品」降三世曼荼羅廣大儀軌分（§619 - 1467）
- ・施護訳『三十卷本教王經』

「金剛界品」の主尊について

まず問題とするのは毘盧遮那如来についてであるが、この尊格は本經において二種の存在のあり方があり、なおかつ様々な呼称で呼ばれる（一切如来、金剛界如来）複雑な存在である。そこでこの尊格の性質について改めて確認をしておこうとおもう。

『金剛頂經』をプトンの分類法により分類したとき、四つの時期のうちの第三期にあたる瑜伽タントラに配当されるが、その特徴としてはヨーガが中心であり、禪定（samādhi）をして精神を統一し、その中で仏と我との合一を図ることが強調されている。また内容的には即身成仏を説き、信仰の対象として毘盧遮那（大日如来）をおき、法を説いたものは釈迦牟尼仏（仏陀）ではなく、法身大日如来であるとする⁶⁾。

本經には「一切如来（sarvatathāgata）」という言葉が多く用いられるが、この一切如来を一つの尊格名として表現すれば、それは「摩訶毘盧遮那」と呼ばれる。すなわち無始無終なる法界の相をとり、マンダラ全体を象徴する法身の毘盧遮那である。本經においてこの摩訶毘盧遮那の性質を説く部分を「別序段」と呼び、次のように説かれている（以下、堀内校訂本より参照）。

○堀内本 § 7 - 17

【智身としての自性】

atha bhagavān mahāvairocanaḥ sarvākāśadhātusadāvasthitakāyāvākcitta-vajraḥ / (§7)

その時、一切虚空界に常に住して、身・語・心の金剛なる（金剛のように堅固な）世尊毘盧遮那は、
【四波羅蜜としての自性】

sarvatathāgatasamavasaraṇatayā sarvavajradhātuvabodhanajñānasattvaḥ /

一切如来の集会すること（集合体）によって、一切〔であり〕、すなわち金剛界〔であり〕、〔一切有情を〕
覚悟せしめる智慧の存在であり、【金剛波羅蜜】

sarvākāśadhātuparamāṇurajovajrādhiṣṭhānasambhavajñānagarbhaḥ / (§ 8)

一切虚空界の極微塵の金剛加持から生ずる智慧の蔵（摩尼）であり、【宝波羅蜜】

（以下略）

もう一つの毘盧遮那のあり方は曼荼羅上の一尊として限定され、その中央に位置する「毘盧遮那如来」である。この毘盧遮那如来は受用身の毘盧遮那であり、五相成身観により色究竟天において成道したのちに曼荼羅の出生等を行うが、その様子を本経では次のように説いている。

○堀内本 § 31 – 33

【金剛界如来の成道】

atha bhagavān vajradhātus tathāgatas tasmin eva kṣaṇe sarvatathāgatasamatājñānābhisaṃbuddhaḥ sarvatathāgatavajrasamatājñānamudrāguhya-samayapraṇiṣṭaḥ sarvatathāgatadharmasamatājñānādhigamasvabhāvasuddh-aḥ sarvatathāgatasarvasamatāprakṛtiprabhāsvarajñānākara bhūtas tathāgato

’rhan samayaksambuddhaḥ samvṛtta iti // (§ 31)

その時、尊き金剛界如来は、まさにその瞬間において一切如来の平等性の智慧（平等性を認識した智慧）を現証し、一切如来の金剛平等性の智慧（金剛の智慧において平等であることを認識した智慧）の印である秘密の三昧耶に入り、一切如来の法平等性の智慧（法において平等であることを認識するその智慧）に到達し、（その智慧に通達することによって）自性清浄となり、一切如来の一切平等性の自性光明（清浄）なる智慧（あらゆる点で完全に平等なることを認識する智慧）の蔵（源）となり、如来・阿羅漢・正等覚者となった。

【宝灌頂】

atha sarvatathāgatāḥ punar api tataḥ sarvatathāgatasattvavajrān niḥṣṛtyākāśagarbhamahāmaṇiratnābhīṣekeṇābhīṣivyaḥvalokiteśvaradarmajñānam

utpādyā, sarvatathāgataviśvakarmatāyāṃ pratiṣṭhāpya, yena sumerugirimūrdhā, yena ca vajramaṇiratnaśikharakūṭagāras, tenopasaṃkrāntāḥ /

upasaṃkrāmya vajradhātuṃ tathāgataṃ sarvatathāgatatve ’dhiṣṭhāya, sarvatathāgatasimhāsane sarvato mukhaṃ pratiṣṭhāpayāṃ āsur iti // (§ 32)

その時、一切如来たちは再びまた一切如来の薩埵金剛（月輪中の金剛杵）から出て、虚空蔵の大摩尼宝の灌頂によって灌頂して、観自在の法の智慧を生じて、一切如来の種々の事業者として安立させて、須弥山の頂にある金剛摩尼宝頂楼閣に近づいた。近づいて、金剛界如来を一切如来たることにおいて加持して、一切如来の〔座るべき〕獅子座において、すべての方向に向いて（四方に面して）安立せしめた。

【金剛界如来の会座】

atha khalv akṣobhyas tathāgato ratnasambhavaś ca tathāgato

lokeśvararājaś ca tathāgato 'moghasiddhiś ca tathāgataḥ
 sarvatathāgatatvaṃ svayam ātmany adhiṣṭhāya bhagavataḥ
 śākyamunes tathāgatasya sarvasamatāsuptivedhatvāt /
 śarvadikṣamatām adhyālambya catasṛṣu dikṣu niṣaṅṅāḥ // (§ 33)

その時、実に、阿閼如来と宝生如来と世自在王如来と不空成就如来は一切如来性を自分自身において加持して、尊き釈迦牟尼如来は一切の平等性によく通達することから、〔それらの四如来は〕一切の方角は平等であるということを観て、四方において座した（住した）。(以下、十六大菩薩の出生につづくが省略)

このような二種の毘盧遮那があることを踏まえたくて、毘盧遮那という存在についてももう少し詳しく見ていこうと思う。一般的に大乘仏教經典の多くは釈尊によって説かれた教えであると考えられている。また、インド初期密教の經典においても、古代インド人が古くから伝えてきた呪法や宗教的な儀礼または防護呪 (paritta) のようなものを含んでいるとはいえ、釈尊によって説かれたという基本的な形式は踏んでいる。しかし、インド中期密教になると突如として、説法の主が釈尊ではなく大日如来に変化する。つまり、インド中期密教經典を代表する『大日経』や『金剛頂経』は、教主を伝統的な釈尊とはせず、新しい仏である大日如来を登場させている。それではなぜ釈尊ではなく大日如来を登場させたのか、またその間にはどのような関係性があるのだろうか、という疑問がわいてくるが、この疑問点について釈尊と毘盧遮那の関係について少し考えてみようとおもう。

まず釈尊という人物は歴史上の人物であり、またブツダガヤーの菩提樹のもとにおいて成道した覚者(仏陀)であり、無師独悟(自ら悟った仏)であり、その生涯の間に説いたことがらは仏典としてまとめられている。そして釈尊が入滅した後、釈尊一仏の信仰が起り、続いて釈尊の超人的な救いを求める者達(在家信者)によって仏塔信仰が起る。やがて大乘仏教になると大乘仏教徒たちは自らを菩薩と呼び、仏陀になることが最高の理想であると考え、また現在において十方の世界において無数の仏陀が存在するというふうに信仰の対象にも変化が現れてくる。

一方、大日如来すなわち毘盧遮那如来は『華嚴経』⁷⁾の毘盧遮那仏から出たものであるが、ここでは毘盧遮那仏を中心とする無数の仏国土が互いに他をつつみあう相互関係にあり、その一つ一つの仏国土にまた無数の仏・菩薩がいて、これらすべてが毘盧遮那仏と内面的に関係しあっているとされる。また、大日如来は歴史的な存在ではなく、真理そのものを具体化した仏であり、換言すれば法 (dharma) そのものの人格化(法身)である。

ここで、これら歴史上の仏陀と法身毘盧遮那という二つの異なった存在をつなげるものを『真実摂経』から読みとってみようとおもう。本経の「五相成身観」を説く部分によると大日如来(毘盧遮那如来)の報身・受用身である一切如来たちが、一切義成就という名の菩薩が座している菩提道場に行き、その菩薩の目を覚まさせ(驚覚)、五相成身観という観法を教えることによって成道させるという内容が説かれている。ここに登場する一切義成就菩薩は、サンスクリット語で「sarvārthasiddhi」といい、釈尊の幼名の「siddhārtha」のアナグラムであるというのは周知のことであるが、この段に対して松長有慶氏は『密教・コスモスとマンダラ』において次のように述べている。

「菩提樹下の釈尊の修行とか悟りは十分なものではなく、密教の行によって、はじめて完全となったことを暗示していると見てよいであろう。釈尊の悟りは、完璧なものではなかった。あるいは悟りは完全であったが、説いた教えは悟りの全体を網羅していない、このいずれの考えにしても、釈尊

が現実に説いた教えよりも、その背後にある真理そのものが問題となっていることに間違いはない。」⁸⁾

これは一つの見解に過ぎないが、つまりは歴史的な人物としての釈尊よりも、その背後にある真理、すなわち法を重視する人たちによって、真理を身体とする仏、すなわち大日如来という新しい仏が考えだされたのであると推測できる。このことについて、金岡秀友氏はその著『密教の哲学』において、「歴史的仏陀の脱却、新たなる歴史性の付与」⁹⁾と表現している。

「降三世品」の主尊について

次に「降三世品」についてだが、その中心となる尊格は金剛手菩薩が忿怒尊となった降三世明王(Trailokyavijaya-vidyārāja)である。降三世とは「三世の勝利者を降すもの」の意で、この降三世明王は仏教に帰依せず自らを三世の勝利者と称する大自在天(Maheśvara)を降伏し、仏教の教えに導くということが主要なテーマとなる。

ここで問題とすることは、前の「金剛界品」には登場しない明王という存在がこの品において初めて登場したということである。これが何を意味するのか頼富本宏氏の「明王成立の四条件」をもとに考えてみたい¹⁰⁾。

頼富氏は明王という尊格が成立するための条件として次の四つを挙げている。

- (1) 特定の真言・陀羅尼を持つこと。
- (2) 威力を表すために原則として忿怒尊であること。
- (3) 特定のヒンドゥー尊を降伏すること。
- (4) 仏教のある尊格の化身であること。

これらの条件を降三世明王(金剛手菩薩)に当てはめると、すべての項目が合致することがいえる。まず(1)真言については、堀内本 §656 に降三世明王真言がある。

○堀内本 §656

【金剛部主の変現】

降三世明王真言

oṃ śumbha niśumbha hūṃ ḡṛḥṇa ḡṛḥṇa hūṃ ḡṛḥṇāpaya hūṃ ānaya ho bhagavan vajra hūṃ phaṭ //

オーン シュンバよ ニシュンバよ フーン 捕えよ 捕えよ フーン

捕えしめよ フーン 引き入れよ ホー 世尊よ 金剛よ フーン パット

この真言中に登場する「シュンバ ニシュンバ」は、インド神話における阿修羅の兄弟のことで、シヴァ神の妻カーリー(パールバティの化身)によって打ち滅ぼされたとある。そして、本経においては仏教の教えに従わない大自在天、並びにその妻ウマ妃を降伏するため、金剛手菩薩はそれら阿修羅の姿をとったとされる。この阿修羅の姿こそ(2)の忿怒尊の条件と(4)のある尊格の化身である条件を満たしているといえる。

最後に(3)の特定のヒンドゥー尊を降伏することである。周知のことではあるが、前述した大自在天はヒンドゥー教の神とはシヴァ神のことを指す。残念ながらヒンドゥー教についての知識はあまりないので詳しく論じることはできないが、降三世明王(金剛手菩薩)は毘盧遮那如来の命を受けてこのヒンドゥー教の神を降伏し、仏教に改宗させることがこの「降三世品」の中での一つの目的となる。では本経にお

いて降三世明王たる金剛手菩薩が大自在天たるシヴァ神とどのような論争を展開していたのかを少しみてみようとおもう。

○堀内本 § 661 – 734

【金剛族主の三界諸天降伏】

(1) 大自在天教勅に従わず, 反抗死滅

bhagavān vajrapāṇir āha :

buddhaṃ dharmaṃ ca saṃghaṃ ca śaraṇapratipattitaḥ /
sarvajñajñānalābhāya pratipadyadhvaṃ mārṣā iti // (§ 668)

尊き金剛手がいった。

「汝等, 仏と法と僧とに帰依し, 一切智智の獲得のために行ぜよ」と。

atha yo 'smin lokadhātau sakalatrailokyāghipatir mahādevaḥ sarvatrailokyādhipatyagarv-
ito mahākrodhatāṃ darśayann evam āha // : (§ 669)

そのとき, この世界における全三界の主宰である大〔自在〕天は, 一切世界の主宰であることを誇り, 大きな怒りを示して次のようにいった。

ahaṃ, bho yakṣa, trailokyādhipatir īśvaraḥ karttādhipatī sarvabhūteśvaro devātidevo
mahādevaḥ, tat katham ahaṃ yakṣājñāṃ kariṣyāmi // (§ 670)

「おお, 葉叉よ, 我は三界の主宰, 自在者, 能作者, 破壊者, 一切の鬼神の主, 天の中の天, 大天なり。どうして我は葉叉の教勅をなさんや」

atha vajrapāṇiḥ punar api vajram ullālayann ājñāpayati /:

bho duṣṭasattva śiḡhraṃ praviśa maṇḍalam /
mama ca samaye tiṣṭha // (§ 671)

その時, 金剛手は再びまた, 金剛杵を抽擲しつつ命令した。

「おお, 悪しきものよ, 速やかに曼荼羅に入れ, そして我が誓願 (サマヤ) に立て」

atha mahādevo devo bhagavantam idam avocat /:

ko 'yaṃ, bhagavann, idrṣaḥ sattvo, yo 'yam īśvarasyaivam ājñāṃ dadāti // (§ 672)

その時, 大〔自在〕天なる天は世尊に次のように言った。

「このものは誰だ。世尊よ, 自在者に対してこのような命令を出すこのようなものは」

これは前半部分の一部ではあるが, 三界の主宰と称する諸天の代表者大自在天はこのような論争を繰り返した後, それに従わないばかりに殺害されるが「灰自在音」という名の如来として成仏をすることとなる¹¹⁾。これを当時のインド社会に当てはめた時, 仏教を信奉するもの達が降三世明王 (金剛手菩薩) であり, ヒンドゥー教信者達が大自在天であり, 彼等を自分たちの中に組み入れる手段として「降三世品」が作られたと推察できる。

以上, 所々テキストをみながらそれぞれの尊格についてみてきたが, 今のところ「降三世品」の中のほんの一部分しか読んでいないため, 今後検討しなければならないことは多々あるが, 簡単にまとめると「金剛界品」中の金剛界大曼荼羅広大儀軌分における主尊毘盧遮那如来 (金剛界如来) は, 金剛頂経全体における基軸となる存在であり, それに対して「降三世品」中の降三世曼荼羅広大儀軌分における中心尊格である降三世明王 (金剛手菩薩) は, 毘盧遮那如来の配下という位置にあり, 大自在天のような難調伏のものを帰依させる活動体であるといえる。

註

- 1) 堀内本 §1 - 617。
- 2) 大正 18, No.865。
- 3) 大正 18, No.882。
- 4) この「尊格」という呼称は、頼富本宏氏がその論文や研究書等において、仏教における仏・如来等のそれぞれを把握する手段として用いている。
- 5) 「降三世品」は「金剛界品」と同様に六種の曼荼羅を説くが、更にこの品特有の教勅の曼荼羅を加えた計十種の曼荼羅が説かれる。
- 6) 堀内寛仁氏は「金剛頂經所説の教主・大日如来とは、釈迦如来の本身であって、いわゆる伽耶成道の釈迦如来は、その変化身である」
 (『初会金剛頂經の釈尊観』 日本仏教学会年報 通号 50 1984年 pp.157 ~ 171) という見解を示している。類似する論文として以下のものが挙げられる。
 同 「金剛頂經の諸尊名」(密教学会報 27 1988年)
 同 『『初会金剛頂經』所説の教主について』(密教大系 3 法蔵館 1994年)
- 7) 詳しくは『大方広仏華嚴經』
 漢訳 (1) 仏駄跋陀羅訳 60 卷本 (大 9, No.278) ※六十華嚴・旧訳華嚴經。
 (2) 実叉難陀訳 80 卷本 (大 10, No.279) ※八十華嚴・新訳華嚴經。
 (3) 般若訳 40 卷本 (大 10, No.293) ※四十華嚴。
 梵本 十地品と入法界品のみ。
 チベット訳 (2) に類似した完本がある。
 華嚴經に説く教主は「ヴァイローチャナ (毘盧遮那仏)」であり、その本質は悟りの智慧であり、太陽に喩えられる。華嚴經に説く蓮華藏世界は毘盧遮那仏の顕現でもあり、漢訳の 60 卷本では、毘盧遮那仏は永い時間に多くの功德を積み正覚を得たもので、一切の法門を照らすものとされ、報身仏と呼ばれる。
- 8) 松長有慶著『密教・コスモスとマンダラ』(日本放送出版協会 1985年) の pp.154 以下参照。
- 9) 金岡秀友著『密教の哲学』(講談社 1989年) の p.170 参照。
- 10) 頼富本宏「明王の成立」
 (『松長有慶古稀記念論集：インド密教の形成と展開』 法蔵館 1998年) において明王の必要条件として四つ挙げている。類似する論文として以下のものが挙げられる。
 同 「五大明王の成立と展開」(『山崎泰廣教授古稀記念論文集：密教と諸文化の交流』 永田文昌堂 1998年)
 同 「インドの明王像一とくに集明王像の成立に関して一」
 (『明王の図像』 仏教美術研究上野記念財団助成研究会 1996年)
- 11) 堀内本 §732。